

# 「吉岡」記念館

田 淵 結

今、学院上ヶ原キャンパス正門に入って右手、ランバス記念礼拝堂に並び、かつて宗教センターのあった場所に新しい建物の建築工事が進められている。最近その屋根瓦も敷かれ、その建物の全体がその姿を見せ始めている。それが来年4月の竣工を目指す吉岡記念館だ。この建物は今までの学院のなかで非常に新しい意味、役割、機能を持つ建物として設計されているが、そこには従来の宗教センターだけではなく、神学部運営機能、キリスト教と文化研究センター、そして人権教育研究室が入り、学院の「キリスト教主義」に基づく建学の理念を具体的に実践する、教育研究の総合的な拠点として構想されている。

なぜこの建物が「吉岡」と呼ばれるのだろうか。これまで学院では建物、特別賞、奨学金などに歴代北米人院長である名前が冠せられ、そこで創立者ランバス（初代院長）、図書館の基礎を築いたニュートン（三代）、Mastery for Serviceの提唱者ベーツ（四代）、などそれぞれの学院にとっての業績が記念されてきた。そのなかで「吉岡」は、初代院長ランバスが本国教会の命によって突然帰国した後急遽第二代院長に選任され、以後24年間という学院史上最も長く院長を務めた人吉岡美国を覚えるものである。ただし、彼の時代。学院創立の1889（明治22）年には第日本帝国憲法が、翌年には『教育勅語』、さらに10年後には文部省認定学校における一切の宗教教育を禁ずる『文部省訓令第十二号』が出される。つまりキリスト教主義を標榜する学院としては、建学の理念を捨てて文部省の認定を受けるか、認定を得ずに私塾としてとどまるかという議論のなかで、非常に困難な時期吉岡は学院の責任を負った。その結論が最終的に下されるのは第四代院長ベーツの下で、文部省から最初に学院が認定を受けた専門学校としての神学部であったというのは訓令第十二号から見ても意外であるが、それはともかく、吉岡はランバスのビジョンを直接に継承した院長として、当時の日本社会の厳しい動きに向かって性急な結論を求めず、結果私学関西学院の理念・個性を守りぬくことになった。

吉岡記念館の存在は、関西学院の独自の理念、個性を持つ学園であることを、毎日正門を歩いてゆく多くの「関学人」に訴えかけ続けるだろう。

（宗教総主事、文学部宗教主事）